

「忍藩 松平家の歴史」

2018年 3月 24日

旧忍藩第十六代 当主

公益財団法人 忍郷友会

会長 松 平 忠 昌

松平家 歴代当主 一覧表

	名 前	封 地 名	拝領時期(年)	石 高	主 な 出 来 事	備 考
初代	松平 忠明	三河 作手城	慶長 7年 (1602年)	1万7千石	関ヶ原の戦い (1600年)	天正11年生 (1583年)
	まつだいら	伊勢 亀山城	慶長15年 (1610年)	5万石	徳川幕府開府 (1603年)	
	ただあきら	大阪 大阪城	元和 元年 (1615年)	10万石	大阪夏の陣 (1615年)	
2代		大和 郡山城	元和 6年 (1620年)	12万石	鎖国令発布 (1633年)	正保 元年没 (1644年)
		播磨 姫路城	寛永16年 (1639年)	18万石		62歳
	松平 忠弘	播磨 姫路城	正保 元年 (1644年)	15万石	田畑永代売買禁止令	寛永 8年生 (1631年)
	まつだいら	羽州 最上城	慶安 元年 (1648年)	15万石	(1643年)	
	ただひろ	宇都宮城	寛文 8年 (1669年)	15万石	寺子屋(岡山)開設	
3代		白河 白河城	天和 元年 (1681年)	15万石	(1669年)	元禄13年没 (1700年)
		羽州 山形城	元禄 5年 (1692年)	10万石		69歳
	松平 忠雅	羽州 山形城	元禄 5年 (1692年)	10万石	赤穂浪士討入り	天和 3年生 (1683年)
	まつだいら	備後 福山城	元禄13年 (1700年)	13万5千石	(1703年)	延享 3年没 (1746年)
	ただまさ	伊勢 桑名城	宝永 7年 (1710年)	11万6千石	宝永大地震 (1707年)	63歳
4代	松平 忠刻	伊勢 桑名城	延享 3年 (1746年)	11万6千石	享保の改革	享保 2年生 (1717年)
	まつだいら				(1717年~1745年)	天明 2年没 (1782年)
	ただとき					66歳
5代	松平 忠啓	伊勢 桑名城	明和 8年 (1771年)	11万6千石		延享 3年生 (1746年)
	まつだいら					天明 6年没 (1786年)
	ただひら					41歳
6代	松平 忠功	伊勢 桑名城	天明 7年 (1787年)	11万6千石	天明の大火 (1788年)	宝暦 6年生 (1756年)
	まつだいら				寛政の改革 (1787年~)	文政13年没 (1830年)
	ただかつ					75歳
7代	松平 忠和	伊勢 桑名城	寛政 5年 (1793年)	11万6千石		宝暦 9年生 (1759年)
	まつだいら					享和 2年没 (1802年)
	ただとも					44歳
8代	松平 忠翼	伊勢 桑名城	享和 2年 (1802年)	11万6千石		安永 9年生 (1780年)
	まつだいら					文政 4年没 (1821年)
	ただすけ					42歳
9代	松平 忠堯	伊勢 桑名城	文政 4年 (1821年)	11万6千石	進脩館開講 (1811年)	享和 2年生 (1802年)
	まつだいら	武蔵 忍城	文政 6年 (1823年)	10万石		元治 元年没 (1864年)
	ただたか					63歳
10代	松平 忠彦	武蔵 忍城	天保 8年 (1837年)	10万石	天保の改革・大飢饉	文化 6年生 (1809年)
	まつだいら				(1830年~)	天保12年没 (1841年)
	たださと					33歳
11代	松平 忠国	武蔵 忍城	天保12年 (1841年)	10万石	従四位侍従 溜間詰	文化12年生 (1815年)
	まつだいら				(1845年)	
	ただくに				ペリー来航 (1853年)	明治 元年没 (1868年)
12代						54歳
	松平 忠誠	武蔵 忍城	文久 3年 (1863年)	10万石	大政奉還 (1867年)	天保11年生 (1840年)
	まつだいら				戊辰戦争 (1868年~)	明治 2年没 (1869年)
13代						30歳
	松平 忠敬	武蔵 忍城	明治 2年 (1869年)	10万石	戊辰戦争、廃藩置県	安政 2年生 (1855年)
	まつだいら	忍 県知事	明治 2年 (1869年)		子爵従三位 (1884年)	大正 8年没 (1919年)
14代						65歳
	松平 忠壽				海軍将校 日露戦争に参戦	明治15年生 (1882年)
	まつだいら				忍郷友会創立 (1905年)	
15代					貴族院議員 子爵従三位	昭和57年没 (1982年)
					(1932年)	101歳
	松平 忠晃					大正 3年生 (1914年)
16代	まつだいら					平成15年没 (2003年)
	ただてる					89歳
	松平 忠昌					昭和19年生 (1944年)
17代	まつだいら					
	ただまさ					
	松平 忠直					昭和50年生 (1975年)
	ただなお					

「松平 忠明」



「奥平 信昌」



「亀姫」



(1) 松平家について

① 家祖は「松平 忠明」、奥平八郎信昌(奥平家第15代)と亀姫(徳川家康の長女)の第四子

- ・ 天正16年に徳川家康の外孫(養子)となり、松平姓を許され、将軍家継承第四位を賜った徳川家連枝の家系
- ・ 徳川家親藩として要衝の地に封ぜられる事が多く、忍城に封ぜられてからは、江戸湾の防衛を任された
- ・ 在府親藩として「参勤交代」を免除されていた
- ・ 江戸城内では「溜間詰」を拝命(将軍の側近)

因みに、江戸城内には「格式」により次の様な部屋があった:

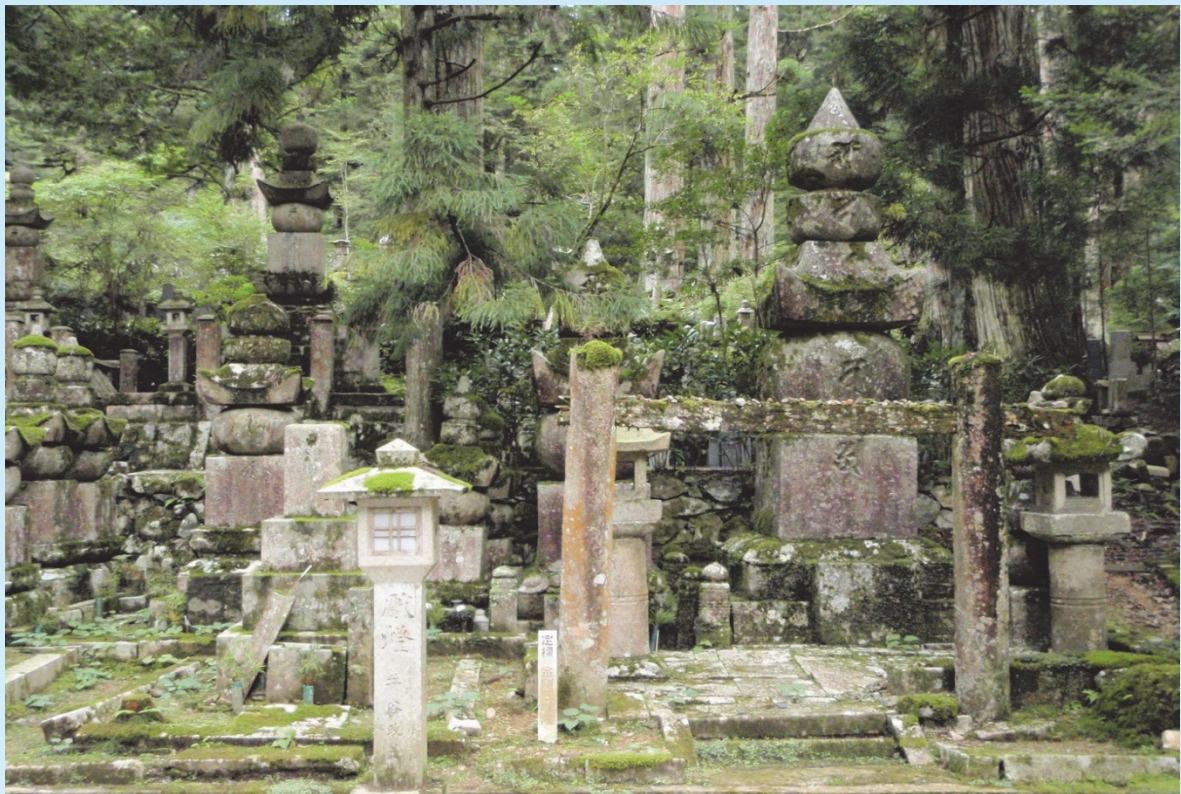
溜間	(たまりのま)	老中職
大廊下	(おおろうか)	御三家、大大名(12)
大広間	(おおひろま)	御三家庶流、外様大名(30)
雁の間	(がんのま)	高家、諸大名(42家)
帝鑑の間	(ていかんのま)	譜代、交替寄合(63家)
柳の間	(やなぎのま)	四位以下の大名、等(83家)
菊の間	(きくのま)	3万石以下の大名、大番頭(37家)
無席	(むせき)	その他

② 奥平家は、第62代村上天皇を祖とした家系
「村上天皇」-「具平親王(第七皇子)」-「師房」-「顯房」
-「雅兼」-「定房」(奥平家の家祖)

③ 初代「忠明」は、天正11年(1583年)新城城にて誕生

- ・ 慶長7年(1602年)20歳の時に「三河作手(つくで)城」
1万7千石を拝領
- ・ 28歳で「伊勢亀山城」 5万石
- ・ 33歳で「大坂城」 10万石
- ・ 38歳で「大和郡山城」 12万石
- ・ 57歳で「播磨姫路城」 18万石
- ・ 正保元年没(1644年) 62歳

「忠明墓所（高野山中性院）」



「亀姫墓所（高野山中性院）」



- ④ 2代「忠弘」寛永 8年 生（1631） 忠明の長男
- ・ 14歳で「播磨姫路城」 15万石 家督相続
 - ・ 18歳で「羽州最上城」 15万石
 - ・ 38歳で「宇都宮城」 15万石
 - ・ 51歳で「白河城」 15万石
 - ・ 62歳で「山形城」 10万石（減封）
 - ・ 元禄13年没（1700） 69歳 天眼寺開基
- ⑤ 3代「忠雅」天和 3年 生（1684） 忠弘嫡子清照の長男
- ・ 8歳で「山形城」 10万石 家督相続
 - ・ 16歳で「備後福山城」 13万5千石
 - ・ 28歳で「伊勢桑名城」 11万6千石
 - ・ 延享 3年没（1746） 62歳
- ⑥ 4代「忠刻」から 9代「忠堯」まで 桑名城主
- ⑦ 9代「忠堯」享和 2年 生（1802）
- ・ 19歳で「伊勢桑名城」 11万6千石 家督相続
 - ・ 21歳で「武蔵 忍城」 10万石（転封、領地三処替）
 - ・ 元治 元年没（1864） 62歳
- ⑧ 9代「忠堯」から 明治維新まで 忍城主
- ⑨ 13代「忠敬」安政 2年 生（1855）
- ・ 14歳の時 明治2年（1869） 廃藩置県となり 初代 忍県知事
 - ・ 29歳 子爵従三位
 - ・ 大正 8年没（1919） 64歳
- ⑩ 14代「忠壽」明治15年 生（1882）
- ・ 38歳 日露戦争より凱旋、忍郷友会創設（1905）
 - ・ 昭和57年没（1982） 101歳
- ⑪ 15代「忠晃」大正 3年 生（1914）
- ・ 学習院から大学は東京帝国大学に進学、日銀から埼玉銀行と金融界の要職を歴任、日本馬術連盟などの公職も務めた
 - ・ 平成15年没（2003） 89歳

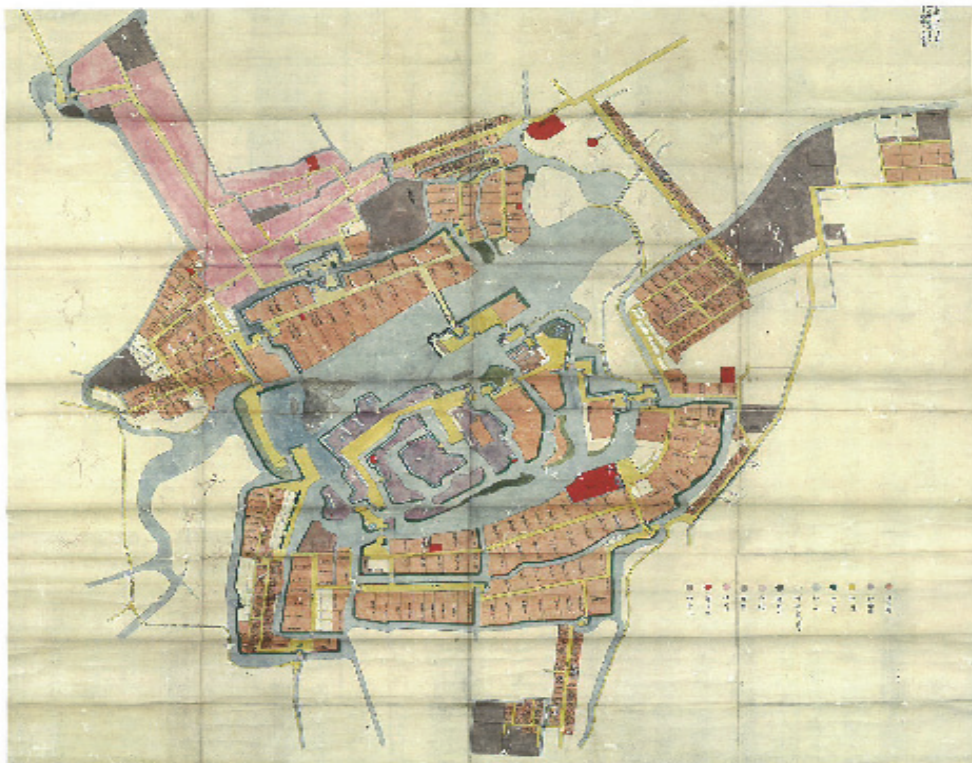
「忍城 御三階櫓」



忍城の本丸には、本丸御殿が家康公の休息所として建てられており、天守閣は築城の時から建設されていないことが特色とも云われている。

現存する「御三階櫓」は、昭和63年に行田市が再建したもので、同市郷土博物館はこれに隣接する形で建設されている。

「文政年間の忍城図」



忍城
文政年間忍城図
二百里代 法皇御色 白公儀・井田吉和土佐内記御色

(2) 松平家のトピックス

- ① 長篠城主 奥平 信昌 徳川家に属する
- ② 長篠の合戦・設楽が原の決戦
- ③ 奥平 信昌 と 亀姫（織田 信長の媒酌）
- ④ 家租 忠明 誕生（天正11年 1583年）
- ⑤ 徳川 家康 江戸城入府（天正18年 1590年）
- ⑥ 徳川家康 征夷大將軍に任ぜられる
（慶長8年 1603年）
- ⑦ 大坂 冬の陣
- ⑧ 大坂 夏の陣
- ⑨ 忠明 大坂城主に任ぜられる（元和元年 1615年）
・ 道頓堀を完成させる
- ⑩ 忠明 大和郡山城主に任ぜられる（元和5年 1620年）
- ⑪ 忠明 姫路城主に任ぜられる（寛永16年 1639年）
1640年 鎖国令 発布
- ⑫ 忠明 江戸屋敷にて没する（正保元年 1644年）
（墓所は高野山中性院）

- ⑬ 2代 忠弘（姫路城→山形城→宇都宮城→白河城→山形城）
- ・ 忠弘 江戸屋敷にて没する（元禄17年 1700年）
- ⑭ 3代 忠雅（山形城→備後福山城→桑名城）
- ・ 桑名城主 正徳元年 1711年
 - ・ 馬場門邸を賜う（正徳3年 1714年）
- ⑮ 4代 忠刻（ただとき）、5代 忠啓（ただひら）、
6代 忠功（ただかつ）、7代 忠和（ただとも）、
8代 忠翼（ただすけ） 桑名城主
- ⑯ 9代 忠堯（ただたか）
- ・ 忍城主 文政6年 1823年 （三方領地替え）
 - ・ 忍にて病没 元治元年 1864年
 - ・ 天祥寺に葬られる
- ⑰ 10代 忠彦（たださと）
- ⑱ 11代 忠国（ただくに）
- ・ 天保12年から文久3年隠居までの22年間藩政を行っている（この間に江戸湾防衛、品川第三台場の警備などの任にあたっている）
 - ・ 新政府への恭順を決定
 - ・ 忍にて病没 慶応4年 1868年
 - ・ 天祥寺に葬られる
- ⑲ 12代 忠誠（ただざね）
- ⑳ 13代 忠敬（ただのり）
- ・ 米沢藩主上杉斉憲（ときのり）の6男
 - ・ 明治2年忠誠の養子として家督を継ぐ
 - ・ 最後の忍藩主として明治維新を迎える

「松平家 天祥寺墓所」



「天眼寺（谷中）」



天眼寺は、延宝6年(1678年)に二代目忠弘の奥方「藤姫」(細川忠利の娘)が開基となり、松平家の菩提寺となった臨済宗妙心寺派の寺院。

藤姫は元禄11年6月23日卒去、天眼寺殿慈光性輪尼大姉の開基法号を有している。

移転前は立花家(九州)の屋敷があった場所であったが、天眼寺に土地を譲って頂いたもの。



「長篠の合戦」と「設楽ヶ原の決戦」



長篠の合戦は、天正3年5月21日(1575年6月29日)に三河国長篠城をめぐる、3万8千の織田・徳川連合軍と1万8千の武田軍が戦った合戦であり、結果は織田・徳川連合軍の圧勝であった。この戦では、「鳥居強衛門」や「3千挺の鉄砲 3段打ち」等の逸話が有名である。



「鳥居強衛門」

「馬防柵」



「長篠の戦い」は「設楽ヶ原」が決戦の場として有名であるが、その前日には「鳶巣山攻防戦」があり、長篠城包囲の要であった武田軍の砦(鳶ヶ巣本砦、中山・久間山・姥ヶ懐及び君が臥床の各支砦)を攻め落としている。その上に有海村に駐留していた武田軍の支軍まで掃討したので、武田軍は退路を脅かされていた。

この前哨戦の結果 武田方は主将の河窪信実（勝頼の叔父）を含む名のある武将を失った。

設楽ヶ原の決戦に参戦した武将：

(織田・徳川連合軍)

織田軍

織田信長、同 信忠、北畠信雄、織田掃部、柴田勝家、丹羽長秀、羽柴秀吉、滝川一益、明智光秀、水野信元、佐久間信盛、池田恒興、森長可、蒲生氏郷、前田利家、佐々成政、他

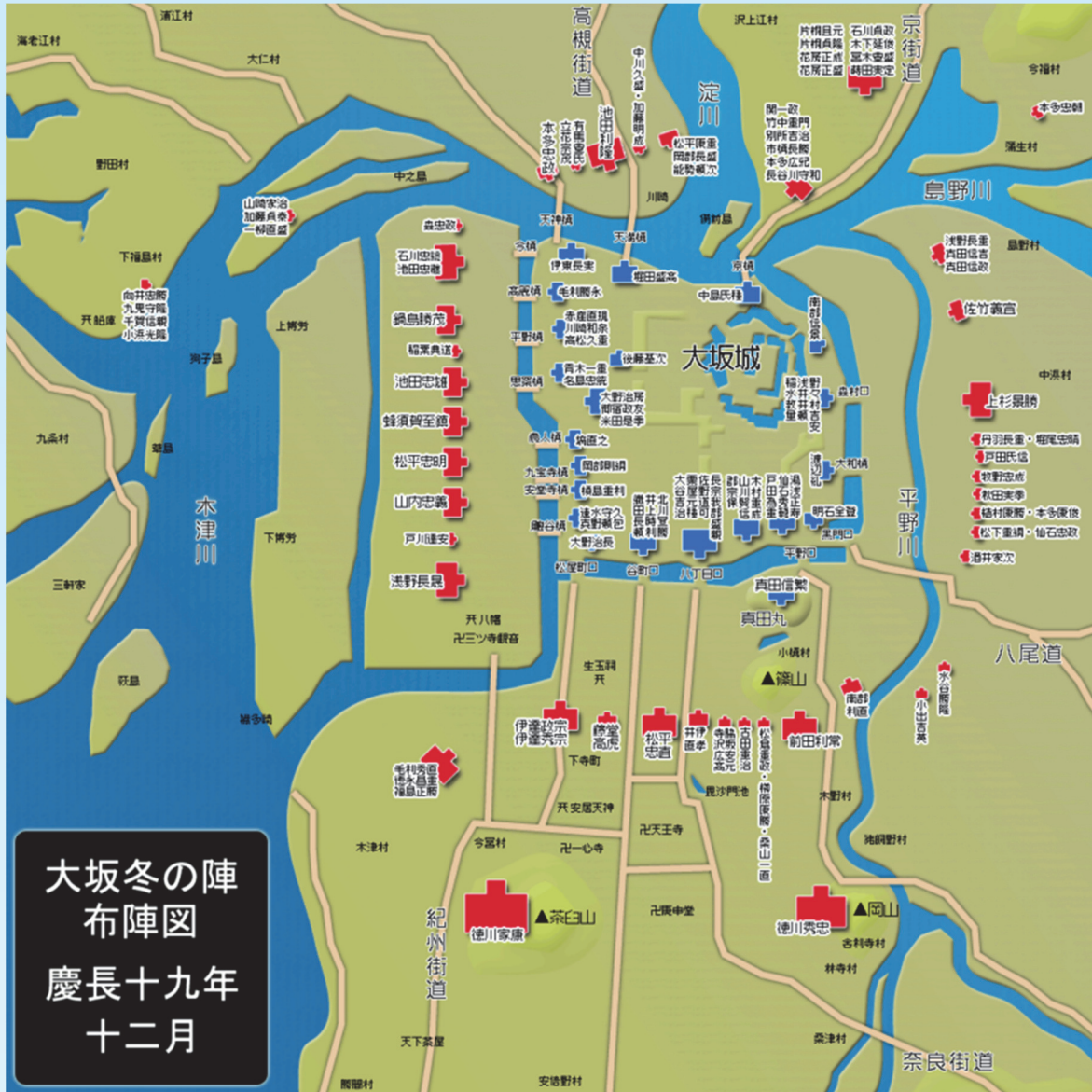
徳川軍

徳川家康、同 信康、松平信一、松平定勝、松平重勝、石川数正、本多忠勝、本多重次、本多正重、本多信俊、榊原康政、鳥居元忠、大久保忠世、平岩親吉、他

武田軍

武田勝頼、武田信廉、武田信豊、望月信永、一条信龍、穴山信君、山県昌景、馬場信春、土屋昌統、真田信綱、跡部勝資、小幡憲重、甘利信康、小笠原信嶺、他

「大坂 冬の陣」と「大坂 夏の陣」



大坂冬の陣は、慶長19年(1614年)12月 豊臣家約9万人と徳川軍約20万人が戦った戦さであり、家祖忠明も参戦。

結果は、和議に持ち込まれたが、その後の堀の埋め立て等から、再度戦さとなり、「夏の陣」が戦われた。

「大坂 冬の陣」と「大坂 夏の陣」



大坂夏の陣は、慶長20年（1615年）4月に、豊臣家約5万5千、徳川軍16万5千が戦った戦であり、豊臣家が全滅し、豊臣家の幕を閉じた結果となった。家祖忠明はこの戦にも参戦（船場口攻め）している。また、この折の戦功を基に大坂の役の後に「大坂城主」に任ぜられた（唯一の「城主」であり、以後は全て「城代職」であった由）。

松平 忠明の事蹟:

長篠の戦功により、徳川家康の娘を嫁にした奥平信昌4男として生まれ、松平家を起こした忠明は、伊勢亀山城主として元和元年(1615年)からの大坂の戦に参戦し、その結果の戦功により戦後の復興を任されている。

初代大坂藩主(10万石)として以下のような幾つかの業績を残している:

1. 大坂城の壊平(三の丸)
2. 市街地開放
3. 京町堀川、江戸堀川、道頓堀川の開削
4. 寺院及び墓地移転廃合
5. 元締衆の任命と市中町割の施行
6. 水帳の制定と町中の制度化

大坂復興の第一に着手したのが、安井道頓が着手していた堀川の開削であり、後に「道頓堀」と命名して今日に至ってる。

また、全国の米を大坂に集め、「堂島」を開設しており、商都大阪の礎になる事業であったと云える。

「三方領地替え」

1. 三方領地替えとは、文字通り三大名家が玉突きで領地を移動させられる転封のことで、江戸時代を通じて「12回」発令されている。
2. 転封の理由は、「領地の加増や出世」、「大名の希望」、「幕府による懲罰」などが挙げられる。
3. 文政六年(1823年)は、「大名の希望」から発令されたと考えられている。
4. 「徳川実記」には、この転封を風刺した狂歌が三首掲載されており、原因が白河藩(松平越中守家)にあることを示唆している。
5. その三首は以下の通り:
 - (1) 住み慣れし 忍をたちのきあべこべに
お国替えとは ほんに白川
 - (2) 白川の ふるふんどしの役おとし
こんど桑名で しめる長尺
 - (3) 蛤の からまでおけと越中が
おし桑名にも 暮れて下総

注：一首目は、あべこべと「阿部家」をかけて、「白河」へ移される心情を詠んだもの。
二首目の「役おとし」を「厄落し」にかけて、「白河藩松平越中守家」が転封により沿岸警備を免除になったことを指すと思われる。
三首目は「桑名」を去る松平下総守家に、名物の焼き蛤の殻まで残せ、忍をくれてやったであろうとの意味かとも云われている。

6. 実際の発令は以下のように行われている:

(1) 文政6年3月12日白河藩主松平定永に
老中連署奉書が届いた(江戸参府を命じた
もの)。

(2) 同年3月24日 江戸に在の白河藩主 松平
定永、武蔵国忍藩主 阿部正権(あべ まさ
のり)及び伊勢国桑名藩主 松平忠堯
(まつだいら ただたか)にも江戸城への登城
が命ぜられ、松平定永(越中守家)には、将軍
徳川家斉(第十一代)より、伊勢国桑名への
転封が命ぜられ、阿部正権と松平忠堯には
老中青山忠裕より、それぞれ「陸奥国白河」と
「武蔵国忍」への転封が発令された。
この折に松平定永は、1810年から拝命して
いた「房総半島沿岸の警備の任」を解かれて
いる。

注 1： 白河藩 松平越中守家の事情

- ① 松平定永の父松平定信は八代将軍徳川吉宗の孫であり、老中首座として「寛政の改革」を実施したことで有名である。
- ② 松平定永は「伊勢国桑名」で生涯を終えたいとの父の希望を転封願として幕府に出し続け、越中守家の悲願であった。
- ③ 同時に「房総半島沿岸警備」という遠隔地の任務は、多大の負担を強いるものであった為、これも何とか解任して貰おうとの思いがあったと見られている。

注 2： 桑名藩 松平下総守家の事情

- ① 松平忠堯は、家督を相続した21歳の青年大名であり、藩政に落ち度もなく、7代 114年間領有した土地を離れる理由は無かったが、幕府の命ということで拝命している。
- ② 白河と桑名では、同じように交通・商業の要衝にあったが、この二家の交換転封では松平下総守家に減益が大きいということで、穀倉地の武蔵国忍が選ばれたと考えられる。

注 3： 忍藩 阿部家の事情

- ① 藩主阿部正権は病弱であり、文政5年には「将軍初御目見」の延期願いを提出する程であった。
- ② 武蔵国忍は、非常時には幕府を軍事面で支える役割を持っていたので、重要な地点の藩主の病弱と藩内統治が俛ならない状況から、阿部家を陸奥国白河に移し、ここに松平下総守家を入れることとして「三方領地替え」が発令されたとされている。

「江戸湾の防衛」

天保13年8月3日 第11代 忠国は、幕府より上総富津から竹岡に至る江戸湾沿岸警備を拝命。

富津陣屋は、4千5百人の将兵が宿泊できる規模のものとして、外敵の来襲に備えたとされている。

陣屋の近くには「御備え場」として、以下の兵器が準備していた：

- ・ 鉄製2貫目玉筒 1挺
- ・ 1貫目玉筒 1挺
- ・ 百目玉筒 1挺
- ・ 2百目玉筒 2挺
- ・ 鉄砲 4百挺

常時藩兵約3百人を駐在させ、弘化4年会津藩に引き継ぐまで、江戸湾の防衛に努めた後、房州洲崎と大房岬の警備を拝命している。

幕府は。米国ペリーの来航に備え、砲台の建設を行い、忍藩は品川警備として「第三台場」の警備も任ぜられている。

「第三台場跡」 （現在の「台場公園」）



「戊辰戦争」

戊辰戦争

1. 慶応4年(1868年)1月3日から明治2年(1869年)5月18日までの内戦である。

2. 戦線の変遷

鳥羽・伏見の戦い→ 甲州勝沼の戦い →
江戸無血開城→ 宇都宮城の戦い→ 上野
戦争→ 北越戦争→ 会津戦争(白河口、
盤城、二本松城、母成峠、会津籠城)→
東北戦争(秋田戦争、野辺地、弘道館、松山、
宮古湾)→ 箱館戦争



3. 第11代 忠国は、早い時期での新政府への恭順を示し、戊辰戦争では忍藩として「白河口の戦い」に出兵している。
縁戚に「四條隆謨」(従四位上行侍従)が居り、京都からの情報により「恭順」が最善との結論で、藩内を纏めたもの。
余談ながら「四條隆謨」は、「七卿落ち」で長州に逃れた後、王政復古により新政府が実権を握ってから「中国四国追討総督」を始めとして「大坂鎮台」、「名古屋鎮台」、「仙台鎮台指令長官」を経て、貴族院議員となり、侯爵を叙爵している。

4. 「白河口の戦い」は、慶応4年(1868年)4月から7月に奥羽越列藩同盟軍(仙台藩、会津藩、米沢藩、棚倉藩、旧幕府歩兵隊、等)と新政府軍(薩摩藩、長州藩、大垣藩、忍藩)が盤城国白河城を巡って戦ったもの。

5. この折の兵力としては、奥羽越列藩同盟の約5千人に対し、新政府軍は7百人(後に板垣退助到着後1千5百人)と劣勢であったが、この戦いを凌いだことがその後の戦況(東北戦争及び箱館戦争)に及ぼした影響は少なからずあったと見られる。
6. 忍藩兵は約2百人で、大砲4門を携行し、戦いに貢献したとされている。

「白河小峰城」



ご清聴を頂き有難うございました